

ロールシャッハ人間運動反応の「型」に 関するノーマティブ・スタディ

木 場 深 志

1. 問 題

ロールシャッハ・テストの運動反応について、Rorschach (1964) は、その著「精神診断学」において、「伸長運動」と「屈曲運動」の概念を呈示している (P.20)。これらの「運動の型」が臨床的に意味する性格特性を実証しようとする試みは、いくつか公けにされている (Endicott and Endicott, 1964; Hammer and Jacks, 1955; Taulbee, 1961; Wetherhorn, 1956; 木場, 1968)。しかし、これらの研究においては、単にロールシャッハ・テストの「伸長M」および「屈曲M」と他のクライテリア (たとえばMMPIのP尺度やD尺度など) との関係をみているのみで、伸長Mと屈曲Mがどの程度の割合で出現しているかということについては明示されていない。伸長Mおよび屈曲Mに関する仮説の妥当性の問題については、本報告では直接問題にはしないが、たとえば伸長Mについていえば、伸長Mが出現し易いカード (又は領域) において産出された伸長Mと、伸長Mが出現しにくいカード (又は領域) において産出された伸長Mとでは、当然その意味づけ (解釈) が異なるであろうと考えられる (勿論、「考えられる」というだけの話であって、実証的なデータを持って主張しているわけではない)。にもかかわらず、伸長Mと屈曲Mの出現頻度を統制した上でこの仮説を実証しようとした実験は、今までのところでは筆者の知る限り見あらず、そのみか、このことを考慮に入れてさえないのではないかと疑われる。伸長M—屈曲M仮説の最初の提唱者である Rorschach が「伸長と屈曲の運動感覚が同じくらいの容易さで起ってくるよう念入りに作られた、多数のカードについてなされる統制実験が役に立つであろう (P. 20)」と述べているにもかかわらず、その後のロールシャッハ研究者は、少なくともこの点については彼の遺志をつがなかったように思われる。

一方、伸長—屈曲M仮説の検証と直接には関係なくとも、伸長Mと屈曲Mのカード別あるいは領域別の出現率を明示した研究はと見れば、これ又皆無に近い。Beck and Molish (1967) や Piotrowski (1957) には、伸長Mや屈曲M（および阻止M）に関する記述があるが、出現率についてはふれていない。Rapaport and Schafer (1968) には、生起し易いMをカード毎に述べているが、伸長—屈曲には言及していない。Phillips and Smith (1953) には、よく生起するMのノーマティブ・データと称する表があり（P. 66, Table XIV）、出現し易いMの領域と Attitude が示されているが、数量的な扱いはなされていない。ただ一つ筆者の知る限りでは、市村（1967）に、強姦群、小児姦群、性非行群における伸長M、屈曲M、阻止M、伸長FM、屈曲FM、阻止FMの平均出現頻度表があるのみである（P. 352）。ただし、この表には領域が記載されておらず、また、Mの分布が正規型とはほど遠い（本報告の結果の項を参照のこと）と考えられるため、果して代表値として平均をとることに意味があるかどうかは疑問である。

以上、文献について概観したが、せんずるところ、Mの型（伸長、屈曲、阻止等）について出現頻度を数字で示した文献は、前述の市村のものを除いては全くないらしいということである。

2. 本報告の目的

前節にのべたように、Mの型に関してその出現頻度を明らかにした文献は殆んどない。

従って、本報告の目的は、Mの型に関するノーマティブ・データを提供することにある。各型Mの分布型、およびカード別・カードの領域別の各型Mの出現頻度を表示し、具体例を示し、若干の考察を加える。また、診断別の比較（ここでは精神分裂病と精神神経症）も、可能な場合には行なうことにする。

3. 方法

データとしては、1個以上のMを産出している精神分裂病患者のロールシャッハ・プロトコル100例と精神神経症患者のロールシャッハ・プロトコル50例を選択した。精神分裂病群は男子64人、女子36人；平均年齢22才4月、年令範囲14才6月～44才4月；平均教育年令8.9年であり、精神神経症群は男子27人、女子23人；平均年齢23才7月、年令範囲15才0月～44才4月；平均教育年令9.7

年であった。両群ともに入院患者、外来患者を含み、数例を除いては国立および市立総合病院において得られたものである。すべて個人法で、Klopfcr 法により実施された。

こうして得られたM反応は精神分裂病患者群で276個（患者1人あたり2.76個）、精神神経症患者群で134個（1人あたり2.68個）、合計410個であった。これらのM反応をプロトコルからカードにそのままひきうつし（反応領域を添書する）、型の分類を行なった。型の分類は Piotrowski に従い、「伸長M」、「屈曲M」、「阻止M」とした。Piotrowski が、すべてのM反応がこの3つのカテゴリーに分類可能であると考えているのか否かはさだかではないが、本研究においては、一応、可能な限りこのいずれかのカテゴリーに分類するという方法をとることにした。ただし、どう考えても分類不可能と考えられる反応、および後述の、判定者間に判定のくいちがいのある反応を処理するために、「分類不能」というカテゴリーを別に設けた。判定は筆者と、もう1人のサイコロジスト（ロールシャッハ経験10年）が独立に行ない、判定にくいちがいがある場合には、結果の処理に際しては「分類不能」のカテゴリーに入れる（従って、「分類不能」の中には、2人の判定者が共に分類不能とした反応と、判定者間に分類上のくいちがいのあった反応とが含まれている）。

4. 結果と考察

4. 1. 型の判定の信頼性

2名の判定者間に不一致のあったM反応は全体で30個であり、判定の一致率は92.7%（380/410）で木場（1968）の報告よりやや低い。診断別にみると精神分裂病患者群（以下S群と略記する）18個、精神神経症者群（以下N群と略記する）12個であり、N群の例数が50でS群の100例にくらべて半分であることを考慮すれば、型の判定の不一致はN群に多いといえる。しかも、第1表に示すように、不一致は第Ⅲカードに集中している。不一致Mは第ⅢカードでN群では9個、S群では6個、計15個であるが、その内容をみると、判定者の一方が分類不能とし、一方が伸長、屈曲、阻止のいずれかに分類したため結局分類不能のカテゴリーに入ってしまったのは15のうち10個であり、残り5個の内訳は、一方が伸長とし一方が屈曲としたもの2個、一方が伸長とし一方が阻止としたもの3個である。前者（伸長対屈曲）の例としては「火鉢にあたって手を出している」、後者（伸長対阻止）の例としては「背筋力をはかっている」

第1表 Mの型の分類における
判定者間不一致頻度表
(数字は反応の個数)

群 カード	S 群	N 群	計
I	1	1	2
II	5		5
III	6	9	15
IV	1		1
V	1		1
VI	1		1
VII	3		3
VIII			
IX			
X		2	2
計	18	12	30

といったものがある。一方の判定者が分類不能とし、一方が伸長、屈曲、阻止のいずれかに分類して結局分類不能のカテゴリーに入ってしまった例としては、「カメに入った食物を加工している（伸長対分類不能）」、「向いあってポーズをとっている（分類不能対阻止）」というものであった。第IIIカードについて不一致の多いのは第IIカードで、(勿論、M反応数が多ければそれだけ型の判定の不一致も多くなるはずである)「すもうの仕切りをしている（屈曲対阻止）」「立てひざをしている（伸長対屈曲）」といったものである。その他のカードについて見ると、第IVカードで「座って足を拡げている（伸長対屈曲）」、第Vカード「人間がよりそっている（屈曲対阻止）」等がある。全般的に見れば、「向いあっている」といった Posture M を伸長とみるか分類不能とみるかという点における判定のくいちがい比較的多いようである。この点に関しては、2人の判定者が同じ Piotrowski の基準によるとはいえないが、判定態度によって若干の差が生ずることを意味する。ちなみに、判定のくいちがいのために分類不能のカテゴリーに入れられた反応30個について、そ

の判定結果を見ると、筆者の判定では伸長：屈曲：阻止：分類不能の割合が 9：4：4：13であるのに対し、もう一方の判定者の場合にはこの比率が 16：5：4：5となっている。この数字からすれば、筆者は Posture M を分類不能とする傾向があり、もう一方の判定者は相対的にいってこれを伸長Mとみる傾向があるのではないかと考えられる。判定者間の判定の不一致は、主として伸長Mと分類不能の間に生ずるといえるであろう。

4. 2. 「分類不能」について

「分類不能」カテゴリーのうち、判定者間の不一致のため分類不能としたも

第2表 M反応の分布
(表中の数字は被験者数、カッコ内は総被験者数150に対する%)

群 Mの数	S	N	S + N (%)
1	31	18	49(32.6)
2	29	10	39(26.0)
3	16	7	23(15.6)
4	12	7	19(12.7)
5	3	5	8(5.3)
6	4	1	5(3.3)
7	1	1	2(1.3)
8			
9	1	1	2(1.3)
10	2		2(1.3)
11			
12			
13	1		1(0.7)
計	100人	50人	150人

のについては前述した。従ってここでは、2名の判定者が共に「分類不能」という点で一致した例について述べることにする。このような「純粋分類不能」例は、N群7個、S群21個であり、N群の被験者数がS群の半分であることを考慮に入れても、S群に多い。内容的には2種類あり、1つは Posture M で果して運動反応といえるかどうか迷うようなケース、もう1つは Performance 段階又は Inquiry 段階で運動概念を訂正したり、あるいは説明しているうちに段々と運動の内容が変化してきて被験者自身にもどちらとも決定できず、結局2つ以上の型が同一反応の中に含まれ、いずれが中心概念なのか判定できないケースである(後者は、筆者のデータによる限りはS群に多い)。

前者 (Posture M) の例としては「2人向きあっている(第Ⅲ, 第Ⅶカードによく出現する)」という反応が代表的である。

4. 3. M反応の分布型について

Mの型を無視して、Mの分布を第2表に示す。表中「S」「N」はそれぞれ精神分裂病患者群、精神神経症患者群であり、「S+N」は両群の合計である。この略記法は以下の表でも同様に使用する。S群においてもN群においても、産出したMが1個という者が最も多く、Mの数の増加に従ってこれに対応する例数は減少してゆく。Mの数を横軸にとってグラフを書けば、負に加速された減少曲線を描くと考えられる。このような分布の傾向は、以前に筆者が行なった研究(未発表。精神分裂病50例、神経症58例、心因反応5例、てんかん3例、そううつ病12例、外傷後遺症4例、精神病質13例、その他30例、合計184例、Mの総数481個のデータによる)においても同様であった。このような結果を見ると、諸種の研究においてM反応数のグループ比較を行なう際に、正規分布を前提とした統計的手法を安易に適用することには疑問が残る。

4. 4. 各型Mの出現頻度について

次に、各型(伸長、屈曲、阻止、分類不能)Mの出現頻度を第3表に示す。カード別、領域別についてはここでは考慮しない。表中、EXは伸長M(Extensor M)、FLは屈曲M(Flexor M)、BLは阻止M(Blocked M)、Uは分類不能M(Unclassified M)の意味である。この略記法は以下の表のすべてに使用する。第3表のセルに入っている数字は被験者数、()内は総被験者数150に対する%である。伸長Mの出現が最も多く、伸長Mを産出しない被験者が全体の22%に

第3表 各型M反応の出現頻度

型 Mの数	EX			FL			BL			U		
	S	N	S+N (%)	S	N	S+N (%)	S	N	S+N (%)	S	N	S+N (%)
0	21	12	33 (22.0)	66	29	95 (63.5)	78	40	118 (78.5)	64	37	101 (67.5)
1	35	20	55 (36.6)	29	16	45 (30.0)	17	8	25 (16.7)	33	9	42 (28.0)
2	23	7	30 (20.0)	5	4	9 (6.0)	5	1	6 (4.0)	3	4	7 (4.7)
3	11	6	17 (11.3)	1	1	2 (0.7)	1	1	2 (0.7)			
4	4	3	7 (4.7)									
5	2	1	3 (2.0)									
6	1	1	2 (1.3)									
7	2		2 (1.3)									
8												
9												
10												
11	1		1 (0.7)									
12												
計	100	50	150	100	50	150	100	50	150	100	50	150

すぎないのに対し、屈曲Mを出さない被験者は全体の63.5%、阻止Mの出ない被験者は78.5%にも達する。分布については、Mの数が増加するに従ってそれ

に対応する人数が漸減するが、特に屈曲Mと阻止Mについては4個以上産出した被験者がいないという点が特徴的である。従来、被験者個人個人について、伸長型であるとか屈曲型であるとかいういい方がなされてきているが、全体として伸長Mの出現率が高いということとを考慮に入れるならば、単純に伸長Mと屈曲Mの数だけをもって伸長型とか屈曲型とかという評定をすることは無意味であろう。

4. 5. 各領域別の各型Mの出現頻度

伸長M、屈曲M、阻止M、分類不能Mの出現頻度を、各カード別・領域別に示したのが第4表～第13表である。表の右下端の数字がそのカードに与えられたM反応の総数であり、表中の数字は実数であるが、そのカードにおけるM反応総数に対する%を()内に示しておいた。領域表示のコラムに「W・r」「D₃・r」のように「・r」がついているのは、カードを逆位置にして反応した(プロトコルにおいて「V」と書く場合)という意味である。領域の表示はKlopperに従う。また、運動している人間像(時には動物)がたとえプロットの1部分であっても、それが反応として記号化される時の領域をもって表示する。たとえば、第Iカードにおいて運動している人間像が中央のD₁のみであっても、それが両側のD₂と結合して結局Wと記号化されるような反応であるな

第4表 第Iカードにおける各型M反応の領域別出現頻度

型 群 領域	EX			FL			BL			U			計		
	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N (%)
W	7	3	10	1		1	2		2	2		2	12	3	15 (60.0)
D ₁	3	1	4							1		1	4	1	5 (20.0)
D ₂	1	1	2							1		1	2	1	3 (12.0)
dr	2		2										2		2 (8.0)
計	13	5	18 (72.0)	1		1 (4.0)	2		2 (8.0)	4		4 (16.0)	20	5	25

らば、表ではWとして取り扱うことにする。以下、カードの順に従って表を検討してゆくことにする。

第Iカード (第4表)

伸長Mが圧倒的に多く、屈曲M、阻止Mは少ない。領域別にみるとWでの伸長Mが多い。Wでの伸長Mが多いのは、運動の主体がD₁であるにもかかわらず、これが何らかの形でD₂と結合して、記号上はWとなってしまうことが少なからずあるからである（「女の子が手をひろげておどっている。これ衣裳。」 $D_1 + D_2 \times 2 = W$ ）。N群には伸長M以外のMがない。

伸長Mとしては「手をあげて指揮している」「女の人をまん中にして3人で踊っている」といった運動が多く、屈曲Mでは「まん中の者が抑えられている」、阻止Mでは「ひっぱりあっている」「両側から支えている」という反応が出ている。dr領域に出ている2個の反応は、いずれも運動の主体がD₁で

第5表 第IIカードにおける各型M反応の領域別出現頻度

型 領域	EX			FL			BL			U			計		
	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N (%)
W	14	5	19	2	1	3	1		1	3	1	4	20	7	27 (57.5)
W•r	1		1										1		1 (2.1)
W	2	2	4	2		2				1		1	3	4	7 (14.9)
W•r	1		1										1		1 (2.1)
D ₁							1		1				1		1 (2.1)
D ₂	1		1							1		1	1	1	2 (4.3)
D ₃	2		2	1		1				3		3	6		6 (12.7)
dr	1	1	2										1	1	2 (4.3)
計	20	10	30 (63.8)	3	3	6 (12.7)	1	1	2 (4.3)	7	2	9 (19.1)	31	16	47

はなく、D₂の一部分にある。M反応の生ずる領域のバラツキが小さいことはこのカードの特徴である。

第IIカード (第5表)

全体として伸長Mが多い (63.8%)。

領域を無視すれば、伸長MはS群、N群で差がない。屈曲MはN群に多い。領域別にみると、Wでの伸長Mが多いようである。表中にD₃として示したのは、殆んどが両側のD₃が何らかの Interaction をしているものであって、被験者の Verbalization 如何ではWとなるものである。従って、この表のWとD₃とは、記号こそちがえ領域としては同じであると考えてよい。

伸長Mの運動としては「決斗している」「踊っている」という内容が多い。決斗やケンカといった攻撃的な内容のものと、あそんでいる、おどっているといった Pleasant な内容のものと2通りに大別されるようである。

屈曲Mでは「うつむいている」「かがんでいる」というものが代表的である。プロットの形が内側に湾曲しているにもかかわらず、屈曲Mはそう多くはない。診断別にみれば、S群とN群ではMの出現頻度に差がないようである。

第IIIカード (第6表)

MをPとするカードであるため、Mの量は全カード中最も豊富である。W (黒色領域) およびWに、すべての型のMが出現する。運動している人間像は殆んどD₃であるが、表に見られるようにD₃だけでは阻止Mが出現しない。中央のD₃が加わってWとなるか、それにD₁やD₂が加わってWになるかしないと、阻止Mは構成されない。ここで出現する阻止Mは「引っぱりあっている」「取りあっている」ものが殆んどすべてであって、第VIIカード (後述) に見られるような「バランス」は全くといっていいほど出てこない。

全体としては伸長Mが全反応数の46.9%を占めるが、この伸長M=46.9%という百分比は、全カード中最も低い。この数字の示すものは、伸長Mが出易いことは勿論であるけれどもそれ以外の型の反応がかなり出ているということである。事実、第6表を見るとわかるように、各型Mがかなりのパーセンテージで出現していることがわかる。興味ある結果を見せているのはW領域であって、伸長Mと屈曲Mの出現頻度がS群とN群とでは逆転している (表中の数字は実数であり、S群100例、N群50例であるから、N群の数字を倍にして考えれば比較のためには便利である)。また、D₃ではN群がS群の約2倍のMを産出している。

伸長Mでは「持ちあげている (W)」「踊っている (D₃又はW)」「立っている (D₃)」というものが多く、屈曲Mでは「腰をかがめている (D₃又はW)」

第6表 第Ⅲカードにおける各型M反応の領域別出現頻度

型 領域	EX			FL			BL			U			計		
	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N (%)
W	5	2	7	2		2	4		4	2		2	13	2	15 (10.3)
W・r				1		1							1		1 (0.6)
W	31	9	40	12	10	22	9	6	15	5	8	13	57	33	90 (62.1)
W・r	3		3		1	1							3	1	4 (2.8)
D ₂		2	2							1		1	1	2	3 (2.1)
D ₃										1		1	1		1 (0.6)
D ₅	2		2										2		2 (1.4)
D ₈	6	5	11	3	3	6				4	2	6	13	10	23 (15.9)
D ₈ ・r	1	1	2										1	1	2 (1.4)
dr		1	1	3		3							3	1	4 (2.8)
計	48	20	68 (46.9)	21	14	35 (24.1)	13	6	19 (13.1)	13	10	23 (15.9)	95	50	145

「おじぎしている (D₈又はW)」というような表現のものが殆んどである。阻止Mの出現はWとWにしかなく、S群とN群に差はないようである。内容については前述したので省略する。このカードは伸長M、屈曲M、阻止Mの出現率に差こそあれ、すべての型が出現するという点で、またM反応がかなりこのカードに集中し、その上、反応領域の点でもWやWやD₈に反応が集まる傾向があるというところから、伸長M—屈曲M (及び阻止M) 仮説の検証のためには有用であると考えられる。第Ⅲカードは、そこに与えられるM反応の数こそ多いが、運動の内容という点では今までに例示したようなものに結局は集約さ

れてしまい、バリエティとしては少ないように思われる。

第Ⅳカード (第7表)

反応の約7割が伸長Mに集中する。また、領域の点でもWかW₁ (たいがいの場合D₁が cut される) が多い。人間像が1つだけしか見えないため、人々との Interaction に起因する阻止Mは出現しない。筆者の経験では「バランスを保っている」阻止Mが稀に出ることがあるが、このデータでは阻止Mは全く出ていない。

伸長Mの例としては「歩いている」「ふんばっている」「足を拡げている」というものが殆んどすべてを占めており、屈曲Mの例としては「すわっている」ものが殆んどである。

第7表 第Ⅳカードにおける各型M反応の領域別出現頻度

型 領域	EX		FL			BL			U		計		
	S	N	S	S+N		S	N	S+N	S	N	S	N	S+N (%)
W	11		11		3	2	5		1	1	15	2	17 (73.9)
W ₁	1	2	3		1		1				2	2	4 (17.3)
D ₂	1		1								1		1 (4.3)
dr	1		1								1		1 (4.3)
計	14	2	16	(69.6)	4	2	6	(26.1)	1	1	19	4	23

第Ⅴカード (第8表)

Wでの伸長Mが多い。が、「ねている」「よりかかっている」「押しあっている」などの反応があるため屈曲Mも阻止Mも出現する。伸長Mは「立っている」「踊っている」「とぼうとしている」などで、屈曲Mは、すべて「ねている」か「横たわっている」ものである。drに屈曲Mが3個出ているが、すべてD₁の上半分である。「まん中の何かを引張りあっている」ものは明確な阻止Mであるが、「よりそっている」「よりかかっている」というのは屈曲か阻止かの判定に迷うところである。伸長Mも屈曲Mも、S群とN群とでだいたい同程度の頻度で出現している。

第8表 第Vカードにおける各型M反応の領域別出現頻度

型 領域	EX			FL			BL			U			計		
	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N (%)
W	8	2	10	3	3		2	2		1	1		14	2	16 (64.0)
W·r	1	1		1	1								1	1	2 (8.0)
D ₂	2	2											2		2 (8.0)
d ₁	1		1										1		1 (4.0)
dr	1		1	3	3								1	3	4 (16.0)
計	10	5	15 (60.0)	4	3	7 (28.0)	2		2 (8.0)	1		1 (4.0)	17	8	25

第9表 第VIカードにおける各型Mの領域別出現頻度

型 領域	EX			FL			BL			U			計		
	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N (%)
W	1		1	1	1					2	2		4		4 (40.0)
W·r	1	1											1	1	2 (10.0)
D ₁	1		1										1		1 (10.0)
D ₁ ·r	1	1								1	1		2		2 (20.0)
SW	1		1										1		1 (10.0)
dr				1	1								1		1 (10.0)
計	3	2	5 (50.0)	1	1	2 (20.0)				2	1	3 (30.0)	6	4	10

Rorschach のいう「腰の曲った老婆」はついに現われなかった。

第VIカード (第9表)

第Ⅷカード (後述) と同様、M反応の少ないカードである。伸長Mが多く、阻止Mが全くないが、全M反応数が10個にすぎないので決定的なことはいえない。

伸長Mとしては「人が上をむいている」「立っている」、屈曲Mとしては「すわっている」という反応しかない。

第VIIカード (第10表)

第Ⅲカードに次いでMは豊富である。第Ⅲカードでは伸長Mが最も多く、次いで屈曲M、阻止Mの順であったが、第Ⅶカードでは2位と3位が逆転し、出現頻度は伸長M—阻止M—屈曲Mという順序になり、加えて屈曲Mの出現率が非常に低い。

第10表 第Ⅶカードにおける各型M反応の領域別出現頻度

型 領域	EX			FL			BL			U			計		
	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N (%)
W	26	10	36				3	1	4	2	2	4	31	13	44 (60.3)
W・r	2	4	6	2		2	1		1				5	4	9 (12.3)
W	1		1										1		1 (1.4)
D ₂		1	1				1		1	1		1	2	1	3 (4.1)
D ₃	1	1	2				2	1	3	1		1	4	2	6 (8.2)
D ₄	3	1	4				1	1	2	2		2	6	2	8 (11.0)
D ₄ ・r		1	1										1		1 (1.4)
dr										1		1	1		1 (1.4)
計	33	8	51 (69.9)	2		2 (2.7)	8	3	11 (15.0)	7	2	9 (12.3)	50	23	73

伸長Mは「踊っている」「おどけている」「話しあっている」という内容のものが殆んどである。阻止Mは「にらみ合い」「シーソー」などの内容を持つものであり、第Ⅲカードにおける「引張りあい」「取りあい」のように直接に力をかけあうものではない。屈曲Mはないに等しいが、これはカードを逆位置にして(V)「頭をあわせて尻をうしろへひいて」いるため辛うじて屈曲Mと判定されたものである。領域としてはWにMが多いが、運動の主体はD₁であることが多く、D₁の上に「乗っている」ために記号としてはWとなったものである。領域別ということを考えなければ、伸長MはS群よりN群にやゝ多いように見うけられる。

第Ⅷカード (第11表)

第Ⅶカードと共に、M反応数は少ない方に属する。伸長Mが多く、その伸長MもW以外の領域に出やすい。

伸長Mの例としては「たくさんの人があそんでいる (W)」 「わらっている (W, Hd)」 「手を広げている (D₃)」 というものであり、唯一の阻止Mは

第11表 第Ⅷカードにおける各型M反応の領域別出現頻度

型 領域	EX			FL			BL			U			計		
	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N (%)
W	1		1							1		1	2		2 (18.2)
W・r										1		1	1		1 (9.1)
D ₁	2		2										2		2 (18.2)
D ₃		1	1											1	1 (9.1)
D ₅							1		1				1		1 (9.1)
dr	1	2	3										1	2	3 (27.3)
dr・r		1	1											1	1 (9.1)
計	4	4	8 (72.7)				1		1 (9.1)	2		2 (18.2)	7	4	11

「押しあっている (D₆)」である。伸長MがN群ではS群の2倍出現している。屈曲Mが全く出現していないことが注目される。

第IXカード (第12表)

伸長Mが多い。領域的には特にこれといって出易いところはないらしい。

伸長Mは「わらっている (dr)」 「上をむいている (D₁)」 「踊っている (D₂又はD₁)」 「立っている (dr)」 「斗っている (D₂)」 ものであり、屈曲Mは「かがんでいる (D₂)」 「ころんで手をついた」 などである。唯一つの阻止Mは「にらめっこ (DS)」であった。診断別にみるとN群にM反応が多い。殊に屈曲Mと阻止M (たった1個だけだが) はN群にしか出現しない。

第Xカード (第13表)

伸長Mが全体の66.7%と多い。「大勢であそんでいる (W)」 「たたかっている (W)」 「妖精がとんでいる (D₁₀)」 「おどっている (D₁₀)」 「走っている (dr)」 「握手している (D₆)」 という内容が多く、屈曲Mでは「お参りしている (D₁₀)」 「ねている (D₁₀)」 「すわっている (S)」 などであり、阻止Mは「にらみあい (dr)」 「取りあい (D₁₀)」 である。Wで見られるMは人間たちや動物たちが何かをしているものであって、こまかく見ればD領域に帰せ

第12表 第IXカードにおける各型M反応の領域別出現頻度

型 群 領域	EX			FL			BL			U			計	
	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N S+N (%)
W	3		3										3	3 (16.7)
W・r	1	1	2	1	1								1	2 3 (16.7)
D ₁	2	1	3										2	1 3 (16.7)
D ₂	1	2	3	1	1								1	3 4 (22.4)
DS										1	1		1	1 (5.6)
dr	1	1	2	1	1		1	1					1	3 4 (22.2)
計	8	5	13 (72.2)	3	3	(16.7)	1	1 (5.6)		1	1 (5.6)		9	9 18

第13表 第Xカードにおける各型M反応の領域別出現頻度

型 領域	EX		FL		BL		U		計		
	S	N S+N	S	N S+N	S	N S+N	S	N S+N	S	N	S+N (%)
W	5	5	1	1			1	1	6	1	7 (21.2)
D ₁	1	1							1		1 (3.0)
D ₄	1	1					1	1	2		2 (6.1)
D ₅ ・r	1	2 3							1	2	3 (9.1)
D ₉							1	1	1		1 (3.0)
D ₁₀	3	3	1	1					4		4 (12.1)
D ₁₄			1	1	1	1	1	1	1	2	3 (9.1)
D ₁₇	2	2					1	1	3		3 (9.1)
SW	1	1	1	1					1	1	2 (6.1)
dr	6	6			1	1			6	1	7 (21.2)
計	18	4 22 (66.7)	3	1 4 (12.1)	2	2 (6.1)	1	4 5 (15.2)	22	11	33

られるものである。Dの多いカードだけに反応領域がバラついており、特にMが産出され易い領域というものはないようであるが、筆者の経験からすればD₉のMが少ないのが意外であった。

4.6. 精神分裂病患者群と精神神経症患者群の比較

第14表は、診断別にカード毎の各型Mの出現頻度を示したものである。N群の被験者数がS群の半分であるため、比較に都合のよいようにN群の数字を2倍して()内に示した。伸長M反応についていえば第IVカードと第XカードでS

第14表 各型M反応のカード別・診断別出現度数

型 群 カード	EX			FL			BL			U			計		
	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N	S	N	S+N
I	13	5	18 (10)	1		1	2		2	4		4	20	5	25 (10)
II	20	10	30 (20)	3	3	6 (6)	1	1	2 (2)	7	2	9 (4)	31	16	47 (32)
III	48	20	68 (40)	21	14	35 (28)	13	6	19 (12)	13	10	23 (20)	95	50	145 (100)
IV	14	2	16 (4)	4	2	6 (4)				1		1	19	4	23 (8)
V	10	5	15 (10)	4	3	7 (6)	2		2	1		1	17	8	25 (16)
VI	3	2	5 (4)	1	1	2 (2)				2	1	3 (2)	6	4	10 (8)
VII	33	18	51 (36)	2		2	8	3	11 (6)	7	2	9 (4)	50	23	73 (46)
VIII	4	4	8 (8)				1		1	2		2	7	4	11 (8)
IX	8	5	13 (10)		3	3 (6)		1	1 (2)	1		1	9	9	18 (18)
X	18	4	22 (8)	3	1	4 (2)		2	2 (4)	1	4	5 (8)	22	11	33 (22)
計	171	75	246 (150)	39	27	66 (54)	27	13	40 (26)	39	19	58 (38)	276	134	410 (268)

群に多く、第ⅣカードでN群に多いようである。カード全体(10枚)としてはS群に若干多い。屈曲Mはこの逆で、N群のほうが出現頻度が高い。カード別にみると第Ⅱ、第Ⅲ、第ⅨカードでN群の優位が目立つ。阻止Mは全体としては差がないが、第Ⅰ、第Ⅴ、第ⅧカードでN群に阻止Mが出現せず、逆に第Ⅸ、第ⅩカードではS群に出現しない。分類不能Mは、これも全体としては両群に差がないが、第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅳ、第Ⅴ、第Ⅶ、第ⅧカードでS群優位、第Ⅲ、第ⅩカードでN群優位である。

細かいことはともかく、第14表から明らかに読みとれることは、伸長Mが他の型のMに比較して圧倒的に多いことである(246/410, 60%)。従って、こ

のような数字を無視して「この患者は伸長型であって云々」ということは、およそ意味のないことであろう。

5. 結 語

以上、各型Mの分布型や領域別・カード別出現頻度について報告し、精神分裂病患者群と精神神経症患者群の比較をおこなったが、この程度の例数ではいずれも決定的な主張はなし得ぬように思う。不十分なデータを公表することについては多少心がとがめぬではないが、最初に述べたように、現在のところこのようなデータが皆無なので、あえて公けにすることにした。M反応の型の問題についてはすでに田中(1968)に詳しいが、本報告の製作過程で気のついたことや将来の方向性を、報告の補足と共に記しておくこととする。

第1に問題となるのはMの型の分類基準である。明らかに伸長Mであるとか屈曲Mであるとか決定しうるものについては特に問題はないが、境界例と思われるものが現実にはかなり多い。にもかかわらず、境界例の処理について記述した文献は見あたらず、また、すべてのM反応を「分類不能」カテゴリーを除くいずれかのカテゴリーに分類するかどうか、もしそうでないとなれば分類可能と不能の境界がどのあたりにあるのか、これらの点については全く誰もふれていないようである。本報告においては分類基準として一応 Piotrowski のものを採用し、加えて「可能な限り伸長、屈曲、阻止のいずれかに分類する」という方法をとって92.7%という判定者間一致率を得た。この結果からして、このような分類基準による限り判定の一致率はかなり高いといえるが、このことは、この分類基準が臨床的に有意義であるか否かということとは別問題である。分類基準はそれが臨床的に妥当性を有するかどうかということの吟味を経て決定されるべきものであり、決して一致率(信頼性)の高低のみで決定されるべきものではない。筆者が前記のような分類法をとったのは「そうすることが最も容易」であろうという便宜的な理由のみによるものであり、従ってこれが果して臨床的に意味があるかどうかという問題は今後に残されている。

第2に、この種のノーマティブ・データの表記の方法として、反応領域の示しかたの問題がある。領域を無視してカードのレベルでMの型を云々するならば特に問題は生じないが、領域別の表示をしようとすれば、運動している主体はD領域であるのに、これが他の領域と結合して領域記号としてはWになるというような場合がかなり頻繁に起こる。かと言って、運動の主体が見られた領域のみを表示することは往々にして無意味である(たとえば、第Ⅲカードに

おける運動反応は、主としてその主体がD₃であるが、これにD₃が加わらなければ阻止Mは出ない。その結果記号上はWとなることが多い)。

将来の方向としては、まず例数を更に増す必要があると考えられる。本報告でのMの数は410個であったが、そのうち35%余が第Ⅲカードに、18%弱が第Ⅶカードに出現しており、残りの約47%がそれ以外のカードに分散している。そしてこれが更に各領域に分散するために、表を見てわかる通り1とか2とかいった数字が頻繁に現われ、結論めいたことは何も言えないという結果になる。このような状態では、詳細な妥当性研究も不可能である。もちろん、このような状況はM反応に関してのみではなく、ロールシャッハ記号のすべてに関して言えることであろう。更に言うならば、臨床心理学の世界には全体としてノーマティブなデータが足りないといえる。殊に本邦では、一概には言えぬかも知れないが、基礎的な資料を持たずに壮大な仮説を展開し、統制不足の実験をおこなっている傾向があるように感じられる。有意義な妥当性研究をおこなうために、またロールシャッハ解釈上の参考とするために、今後更に例数を増したいと考えている。本文中に各型Mの実例をいくつか示しておいたが、これを見ると運動の中心概念(座っているとか踊っているとかいった「動作」)のバリエーションはそう多くはないようであるから、Mの型の分類基準表を作製することも不可能ではないであろう。また、ここでは精神疾患のデータのみを扱ったが、正常者のデータも必要である。

末尾に参考文献をあげておくが、本当の意味で参考になった文献は殆んどなかったといってよい。それよりも、金沢ロールシャッハ研究会のメンバーが折にふれて与えてくれた助言が真の意味での参考であったと思う。

参 考 文 献

1. Beck, S. J. and Molish, H. B. 1967 Rorschach's Test. II. New York, Grune and Stratton.
2. Endicott, N. A. and Endicott, J. 1964 The relationship between Rorschach flexor and extensor M responses and the MMPI. *J. clin. Psychol.*, 20, 388—389.
3. Hammer, E. F. and Jacks, I. 1955 A study of Rorschach flexor and extensor human movement responses. *J. clin. Psychol.*, 11, 63—67.
4. 市村 潤 1967 ロールシャッハテスト 新書館
5. 木場清子 1968 ロールシャッハ・テストのM反応の型とMMPIとの関係。(ロールシャッハ運動反応の研究、宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編：116—122.)

6. Piotrowski, Z. A. 1957 *Perceptanalysis*. New York, Macmillan.
7. Phillips, L. and Smith, J. G. 1953 *Rorschach Interpretation : Advanced Technique*. New York, Grune and Stratton.
8. Rapaport, D., Gill, M. M. and Schafer, R. 1968 *Diagnostic Psychological Testing*. New York, International Universities Press, Inc.
9. ロールシャッハ, H 1964 精神診断学 (東京ロールシャッハ研究会訳) 牧書店
10. Taulbee, E. S. 1961 The relationship between Rorschach flexor and extensor M responses and MMPI and psychotherapy. *J. proj. Tech.*, 25, 477—479.
11. 田中富士夫 1968 運動反応の型の問題 (ロールシャッハ運動反応の研究, 第1部 運動反応の諸問題, 第IV章, 宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編)
12. Wetherhorn, M. 1956 Flexor-extensor movement on the Rorschach. *J. consult. Psychol.*, 20, 204.